



人  
壽

年

大



78  
1594

大

年

蘇

化



一



高陽劇飲序

于壽驛中其主人令  
茲年六十於是開初度  
之宴為闋飲之會乃先  
期發招單大集都下

田間一飲客如枉夜俗言波  
良多智

上病葉俗言  
利上戶酒悲俗言  
奈起

歡場官馬俗言利  
久津上戶之類則

槩斷之下言之日相會者

凡一百餘人皆一時之海量

也各左右分隊相坐每

方一人升席左右二人相對

而樂自焉乃六觴改置錄

事而贊以嬌女三人侍

其側而給任焉皆柳橋之

名妓也一人捧盃而進舍

其前二人各執注子左

右注之其酒則所謂玉

-5 315 35 705" data-label="Text">

綠即伊丹之上釀其美矣  
則鯉魚即綾瀨之新鮮

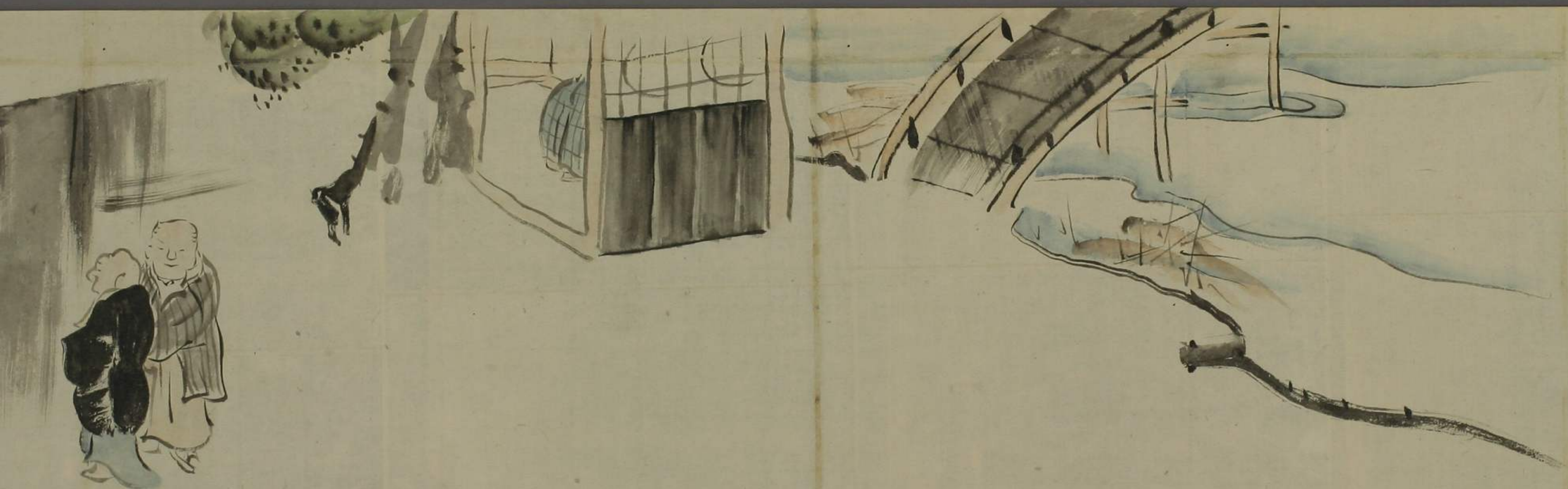
名妓也一人捧盃而進舍  
其前二人各執注子左  
右注之其酒則所謂玉  
環即伊丹之上釀其美矣  
則鯉魚即坡賴之新鮮  
也辨有椽雜陳種不一其  
盃則描金雕鏤實布  
世之珍也自五升而卷之  
或七升或一斗或一斗五  
升或二斗為至大而已或有  
一口及畫者或有數口而  
渴之者大小之篋盃一  
傾其篋者是為第一  
名焉其餘則次之者差  
各簿錄以課甲乙輸  
贏其篋不滿斗者不  
在此數也各雙于捧  
盃引滿車轉飲不餘一滴  
實如長鯨吸百川矢觀  
者皆吐舌坐客喝采不已  
至飲畢眾莫有多言  
喧嘩皆致禮辭謝而  
歸余心酒人也雖然吾  
自知其量之不敵退避  
其隊在傍而觀之乃歎云  
古人謂酒有別腸者如

歸余心酒人也雖然吾  
自知其量之不敵退避  
其隊在傍而觀之乃歎云  
古人謂酒有別腸者如  
今日之人者邪宋張  
安道劉潛石曼卿晁  
耐飲而不別輸贏明  
王漸皋道士闕飲而  
定甲乙水蓮道人輯酒  
顛無懷山人著酒史以  
述其事為太平之感  
事不心宜乎嗚呼主  
人壽已六十而又自祝此  
太平之感事則主人之  
先其有天之美祿乎  
時文化十二年歲舍  
乙未冬十月廿一日  
也

關東鵬齋老人興  
揮龍父撰



關東鵬齋老父興  
揮龍父換





不許惡客  
下戸  
理處  
入菴門  
松書



後水多記

久作太二の...  
新郷子住の...  
酒...  
...  
...  
...





新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す

新集抄の巻末に記す



大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

大田...  
母の

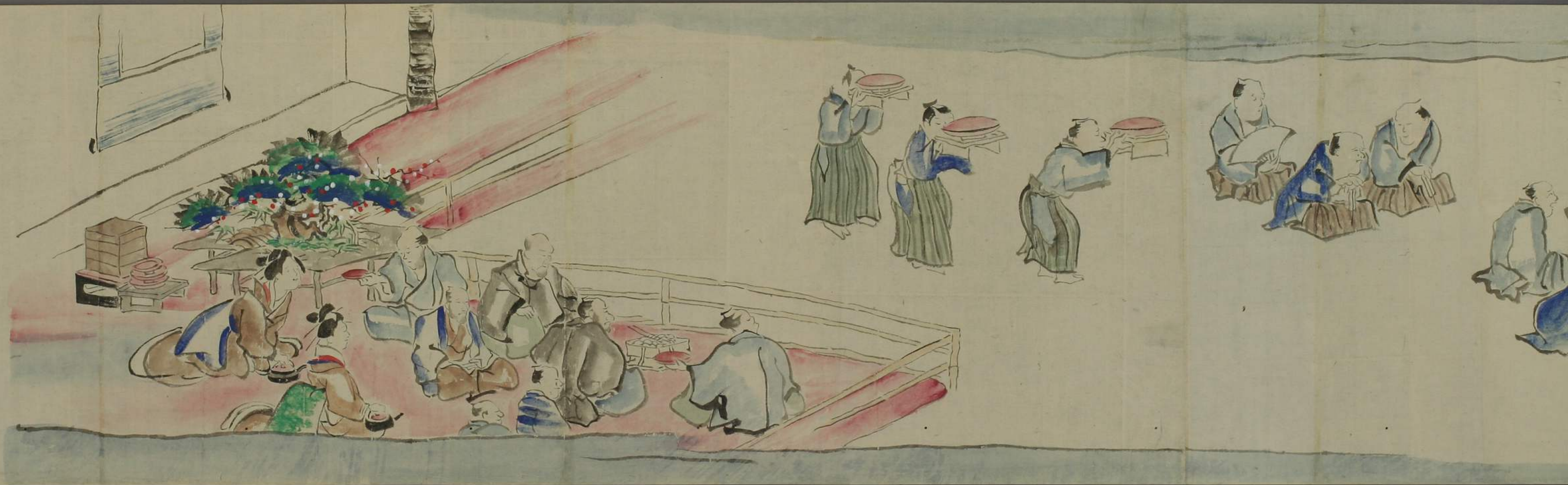
大田...  
母の

大田...  
母の





六十七の蜀山人  
緋井樓  
白雲











心  
馬  
行  
記  
卷  
之  
一

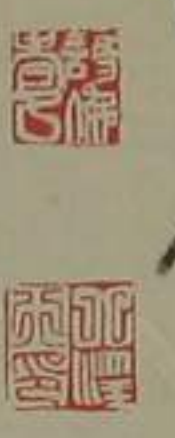


正民  
正民  
正民

酒戰場中勅酒  
兵東西排列右  
策名者如陵酒  
少海飲心子人換  
酒鯨時今太平  
無一事境於  
醉鄉見我率  
鴛鴦杯鷓鴣肉  
酒斟來種々  
領將此酒軍  
有所向之淺天  
以骨然城生春  
我之在之安新邱  
言名困天營

題酒戰圖

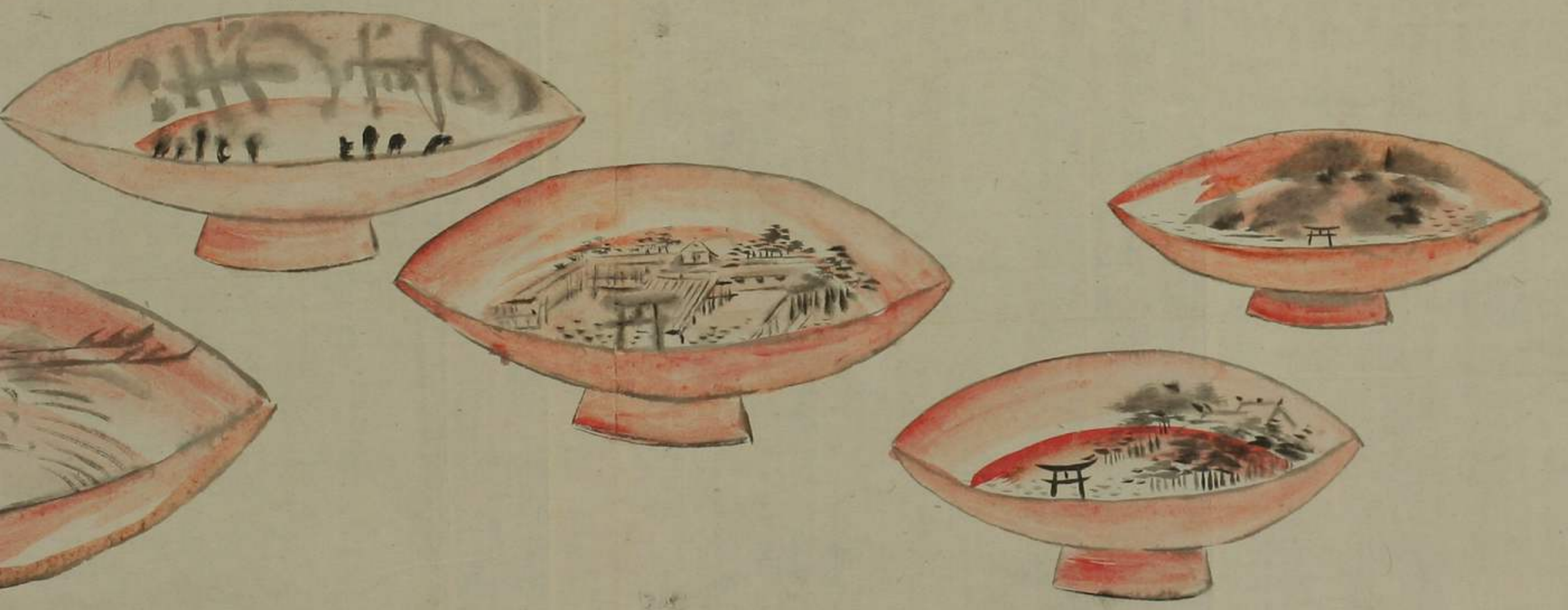
詩所老人  
大層行



領將此酒軍  
 有所向之淺天  
 以甘然味生春  
 我之在室後新邱  
 言必因天黃

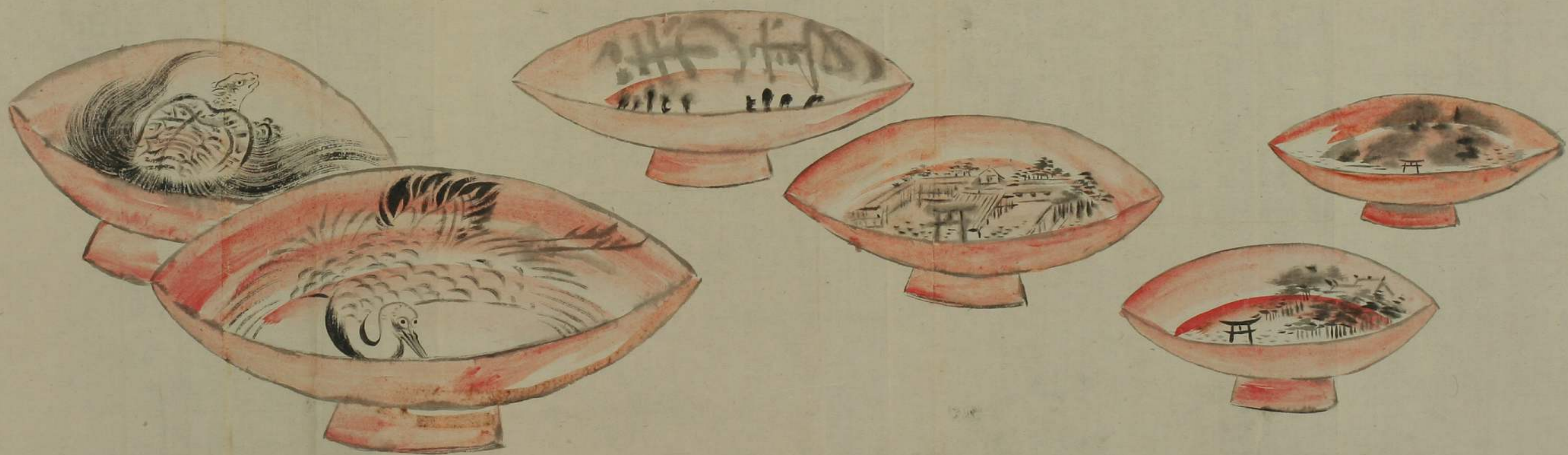
題酒數圖

詩所老人天有行



前年余在崎陽海与屋中

科野奉川藤原彰信筆



科録奉川藤原彰信筆



前年余在崎陽處分屋敷  
劉景筠江芸家華飲成能飲  
其酒而三能飲吾酒固四其  
說乃云苦醇醱而頭痛矣試  
味其所齎紹興酒者甚清而  
帶酸飲至數斗然能面  
潮紅且困是孰之八儂飲中  
三為之上飲至五斗者亦甚  
易之已淡中任中亦隱居以  
海我國當乞海尾南取酸象  
記之勝為海人序之甚美如  
小戶其後河之峰記亦存之  
唐中飲事而通之嗚呼仗此  
酒兵與彼中亦相當千金  
海上則其能三碑何而歸  
者亦僅三人也己

乙亥嘉平月寬高寧丁題  
時年六十七



一 一 一 一

